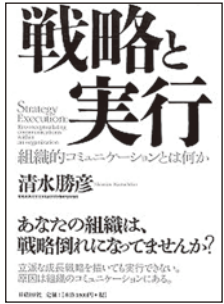


戦略と実行 — 組織的コミュニケーションとは何か

清水勝彦著 日経BP社 2011



商学部教授 伊藤 和憲

本を読むことは新たな発見の場です。そんな気持ちを改めて思った著書が本書です。本書の一部を抜粋してみましょう。

“ムダをなくせ」「将来への投資も必要だ」という議論の中で、ほとんど聞こえてこないのは、それでは、今まで投資してきた「重要案件」が本当にきちんと取り組まれており、想定どおりの結果を出しているのかという「実行」と「成果」についてです。「重要」なのですから、ムダではない。でも、成果が上がっていないのなら、ムダ使いとどう違うのか?” (p.1)

本当にそのとおりです。戦略の多くは確かにムダでしかなかったようです。

“戦略は、立てること、あるいは持つことが目的ではありません。実行して、結果を出す = 差別化を実現し、業績を上げることが本来の目的のはずです。しかし、いつの間にか「戦略」を作ることが目的になっていなかったか、分析やグラフの精緻・華麗さに満足していないか、振り返ってみる価値はあると思います。” (p.36)

これもそうですね。では戦略とは何か、戦略の実行とは何でしょうか。

“戦略の「実行」とはいろいろな定義がありそうですが、ここでは「戦略目的を達成すること」という、結果を重視した定義を取ります。「戦略」とは「将来に向けた仮説」です。” (p.77)

また、次のようにも指摘しています。

“戦略の実行とは、立てた計画を粛々とこなすことではありません。基本的な方向性として合意した「核（どうしてもこれを達成しなくてはならないという目的）」をもとに、行動を通じて完成させ、差別化を確立することが戦略の実行なのです。そのためには、「強い現場」は不可欠であり、多くの日本企業はよい戦略を作り、実行できるための大変重要な資源を持っているということが出来ます。” (p.311)

戦略は難しいと思わず、日本にないといわれた戦略が日本でこそ実行しやすいという著書をぜひ読んでみてください。

道ありき — 青春編

三浦綾子著 新潮社 1980 (新潮文庫)



商学部教授 奥村 輝夫

三浦綾子は、「自分の心の歴史を書いてみたいと思う」といって『道ありき』を書き出した。著者自身の10数年に及ぶ闘病生活がストーリーの基におかれている。それは、いかにも重苦しく、悲しみに満ちた、どん底の闘いの歴史を連想する読者の期待を、見事に外している。むしろ『道ありき』には、未知なるものへの人間の期待があり、一条の光があり、そして希望があることを知らせてくれる。

人間はなんと知らず知らずのうちに、人を傷つけ、悲しませるものであろうか。人間の心はなんと移ろいやすいものであろう。弱いものであろう。生きるということは苦しく、また謎に満ちています、という読者への問いかけが頻繁になされている。でも、

人間はね、一人一人に与えられた道があるんですよ。そして真剣とは、人のために生きる時にのみ使われる言葉でなければならないと思った、というのである。

どのようにつらく、希望などが一かけらもない、そのようなときにでも、くだかれた魂を一ついだいで、人は人に出会えるのだという事を、『道ありき』は静かにつけているのである (同書解説より)。幾度かの入院生活を強いられた若かりし頃の推薦者にとって、本書はなぐさめ、希望、勇気を与えられた一冊であった。青春編とあるように、これからの未来を切り開こうとする若いときに、是非読んでいただきたい一冊である。